

第5回TAMA映画フォーラム特別上映会レポート

『家主 May the DOOM be with you』

今作は、初のスクリーン上映ということもあり、都内のみならず遠方のお客様にも足を運んで頂きました。また、スピーカーを特別に調整し、ライブハウスのようなワイルドな音響での上映となりました。田中ヤコブ氏、山本啓太監督、ライターの松永良平氏のゲストトークでは、「家主」というバンドへの親密さが感じられる貴重な機会となりました。その中でも、ヤコブ氏のソロアルバム「IN NEUTRAL」を多摩市でレコーディングした際のエピソードは、地元多摩にとって特別なものとなりました。



TCFからのお知らせ

第35回映画祭 TAMA CINEMA FORUM

開催
決定!

開催期間: 2025年11月8日(土)～11月24日(月・祝)の9日間

会場: パルテノン多摩大・小ホール／ヴィータホール(多摩市関戸公民館)／ベルブホール(多摩市永山公民館)

※11月12日(水)～14日(金)、11月17日(月)～21日(金)は休映

上映プログラム等の詳細は近日発表!



たまシネマ隊募集



TAMA映画フォーラム実行委員会では、2025年11月開催の「第35回映画祭 TAMA CINEMA FORUM」に向け、10月から11月の映画祭期間限定ボランティア「たまシネマ隊」のメンバーを募集しています。準備作業、広報活動、映画祭当日の運営に携わって、実行委員とともに映画祭を作り上げていきましょう! ご興味ある方は、ぜひ募集説明会にご参加ください。公式HP又はQRコードからお申し込みいただけます。

映画祭 TAMA CINEMA FORUM 公式YouTubeチャンネル

<https://www.youtube.com/c/tamaeiga-official/featured>



支援会員さまを募集中!

映画祭を資金面でサポートいただける支援会員さまを募集中です。限定特典もご用意しております。詳細はHPにて。



【支援金寄付 個人会員】一口1,000円から
郵便振替番号: 00160-5-541123
加入者名: TAMA映画フォーラム実行委員会
<https://www.tamaeiga.org/support/>



たまシネマ通信 2025年夏号(2025/8/23発行)

発行元: TAMA映画フォーラム実行委員会 〒206-0025 多摩市永山1-5 ベルブ永山(永山公民館内)

編集・デザイン: TAMA映画フォーラム会報部会／企画・協力: TAMA映画フォーラム実行委員会

※無断転載を禁じます

映画が教えてくれること

たまシネマ通信

TAMA CINEMA FORUM

夏号 2025年8月23日発行



2025年
第6回TAMA映画フォーラム
特別上映作品

© 2019 kineo Filmproduktion Peter Hartwig, Weydemann Bros. GmbH, Oma Inge Film UG (haftungsbeschränkt), ZDF

CONTENTS ◎鑑賞へ向けたイントロダクション ◎オススメ子供が主役の映画 ◎特別上映会レポート



上映会企画チームより

『システム・クラッシャー』鑑賞へ向けたイントロダクション

システムクラッシャーって？

直訳では「社会(システム)を壊す(クラッシュ)人」ですが、実際は「社会生活になじめず支援からまれてしまう青少年」を意味します。受け入れ先を転々とし、ソーシャルワーカーが個別の対応にあたる場合もあるものの、解決に至らないことも多いとされています。ドイツにはこういった青少年が約5000人いるといわれています。

バーデン＝ヴュルテンベルク・フィルム・アカデミー在学中、ホームレスの女性を採り上げたドキュメンタリーの撮影で、14歳のいわゆる「システムクラッシャー」に出会ったことが本作へとつながりました。制作にあたっては青少年の自立援助ホームを訪ねたり、ソーシャルワーカーに話を聞いたりするなど、事実を丹念に調べ上げることにこだわったそう。在学中からの経験が本作のエピソードの信頼性を高めています。本作の後、彼女も活躍の場を世界へと広がっています。

ノラ・フینگシヤイト
監督・脚本



ヘレナ・ツェンゲル

主演：ベニー役

5歳から演技を始め、撮影時は10歳。オーディションでは7人目でしたが、監督はその後150人と会っても、ヘレナしかないと言いつつ確信するばかりだったそう。実際ヘレナがスクリーンに現れると、ベニーという少女がそこにいると確信させられてしまいます。共演したミヒャ役のアルブレヒト・シュツフも「素の自分から、一気にベニーの衝動に同化して演じることができた大変な才能」と絶賛。公開後はヘレナ自身がベニーのような子なのではと噂されることさえあったとか。本作でドイツ映画賞主演女優賞を最年少受賞し、現在は活躍の場を世界に広げています。ちなみに趣味はピアノとスケートそして乗馬で、乗馬は競技会に出るほど。キウイという犬も飼っていますが、この犬はルーマニアでの撮影時に車に轢かれたのを見つけて動物病院に運び、ベリンへ連れ帰ったのだとか。

多摩地域との意外なかかわりも？

靴屋の売り子役として出演したのは町田市出身の俳優、原サチコさん。現在はドイツ在住で、ハンブルクを代表する公立劇場シャウシュピール・ハウスの正規団員。主に演劇界で活躍しています。撮影は「シーンの状況説明だけがあり、自由に演じてもらう即興的な手法」だったとのこと。作品を観た原さんは「どのシーンも生き生きとしたリアルさを感じさせた」と語っています。(小)



TCF実行委員の

オスス
子供が
主役の映画

My favorite
kid's movie

シシリアン・ゴースト・ストーリー

監督：アントニオ・ビアツァ／ファビオ・グラッサドニア
2017年(イタリア・フランス・スイス)

実際に起きた残酷な誘拐事件の犠牲となった少年に捧げる鎮魂映画。(ほんとに残酷なので詳細は体調のいい時に調べてください)辛い結末ですが、美しい作品でもあります。雄大なシチリアの自然の風景、極限までセリフを排除して音と表情で見せる演出、何より少年少女の互いを思い合う気持ちに、若さゆえの純粋な美しさがあります。監督はこの救いのない事件をそのままなぞることをせず、2人が夢の中で邂逅するファンタジーという形で少年の魂を救済しようしました。悲劇を美化するのではなく、存在を消され、人々から忘れ去られても、愛と記憶によって紡がれた物語は壊すことはできない、暴力では決して奪えないのだと力強く主張します。悲しさと美しさが入り混じった激しい祈りのような物語に最後まで感情をかき乱され、私は劇場で観終わってもしばらく席を立てませんでした。二度は観たくないけど、観てよかったと思う作品です。(遠)

新学期 操行ゼロ

監督：ジャン・ヴィゴ
1933年(フランス)

29歳で夭折したフランスの伝説的映画監督ジャン・ヴィゴが残した、わんぱく子供映画の世界的な始祖…であるかどうかは実際のところ定かではないですが、当時の革命思想をベースにした物語で、子供たちが大暴れする映画です。およそ85年後の『システム・クラッシャー』にも直訳の意味で通ずるかもしれない、抑圧的な学校のシステムをクラッシュする子供たちの様子は、そこに込められた政治的な背景とはもはや関係なく、その映像の躍動感と美しさで観客をいまでも圧倒します。特筆すべきはやはり寄宿舎でのクライマックス。これはどんな言葉を並べても映像それ自体を観ることに勝ることがないと言ええるシーンで、その後も多くの映画に影響を与え参照されています。この機会に子供を主題にした映画の一つとしてこんなクラシックを観てみる…なんていうのもよいのではないのでしょうか!?(岡)

リトル・ワンダーズ

監督：ウェストン・ラズーリ
2023年(アメリカ)

ママにブルーベリーパイを届けるために奮闘する、悪ガキ3人組のひと夏の大冒険。最初はただのおつかいのはずが、やがて悪い大人たちとの戦いに発展していく。仲間が増えたり、敵の組織のボスと戦ったりと、まるでRPGのような展開に心が踊る。彼らのあまりの悪ガキっぷりには「こんなのアリ!？」とツッコミなくなる一方で、イタズラ好きで憎めないそのキュートさに、気づけば虜になっていた。16mmフィルムで映し出される鮮やかな世界は、幼い頃の夏休みの記憶をふわりと呼び起こす。子供の心で見る世界は、どこまでも自由で過激で面白い。あの頃、自分は最強だった。そんな子供の頃の“ワクワク”が、ぎゅっと詰まった一本。(川)